

## 巻 頭 言

森川 幾太郎

昨春、08年版小学校・中学校学習指導要領が告示され、各教科に関する『解説』も08年に発刊された。「08年版」では、算数・数学の指導時数が増加し、それに伴って、「98年版」で大幅に削減された図形領域や統計領域の学習内容の大半が、形を変えてではあるが、復活することになった。なお、「08年版」と「89年版」の小学校算数を比較すると、錐体が削減されていたり、平均や円周率にみるように2学年で分散して指導する、というように、高学年で学習内容の負担が増加しないようにする、といった工夫はなされている。が、小3で、角度の測定なしの角の大小の扱いが依然として残されたままであるし、どの学年でも立体図形と平面図形を統一的に扱う、という視点は今回も手をつけていない。

これは、指導要領の作成者の算数指導に対する見方に問題があると私は思っている。その現れが、「活用」の強調と算数的活動の例示にみることができるよう思う。後者についていえば、例示されたものの多くは、確かに、現在指導に際して標準的に用いられているものではあるが、教科書編集をしぼるものとして作用しようし、それが、新しい指導法の開拓意欲を阻害する要因として作用することを懸念する。

前者については次の懸念を感じている。「活用」という用語の背景には学習を、「基礎あるいは素地」、そして、「本格学習」、最後に、「活用」、という3段階で構成する、という考えが入っているように思う。ここには、学習課題が学習内容を規定する、という発想をみることはできない。学習課題によって規定される学習内容の中には、もちろん、既に学習済みで、この学習場面でその再学習を行うことになったり、「活用型学習」になったりするものもある。しかし、学習の場で出会う事柄がすべてがそうとは限らないのである。

私が試みていただいた「鳥海山の噴火と溶岩流」にせよ「山形五堰の秘密」、さらには、「平行線模様と平面の敷き詰め」でも、子ども達は未習事項に直面した。しかし、これらの学習では、未習問題に直面してもその問題が登場する経緯が子どもにはわかっているので、何の違和感もなく、新たに発生した問題をはじめに提示された大きな問題との関係を考えながら解決にいたったのである。その取り組みは、既習事項を前提にして行われるので、「基礎型学習」や「素地型学習」の役割を否定はしない。しかし、学習者参加型、それも集団で検討し合って解決にいたる学習のダイナミズムを考えると、より重視すべきは子どもが解決したいと願う課題の発見である。

80年代以降学習内容の削減が歓迎されてきた背景には学習離れの進行があったことを忘れてはならない。ただ、学習内容の削減は学習離れを食い止める方向に作用しなかったことをみると、学習課題のあり方そのものの検討を行うことが重要であるように私には思える。

(東北数学教育学会副会長・聖心女子大学)